

『ノストローモ』は我々のもの、とファン・ガブリエル・バスケスは言った

ファン・ガブリエル・バスケス著、久野量一訳

『コスタグアナ秘史』

水声社 二〇一六年一月

はじめに

『コスタグアナ秘史』 *Historia secreta de Costaguana* (二〇〇七) はコロンビアの作家ファン・ガブリエル・バスケス Juan Gabriel Vasquez (一九七三-) の二作目の長編小説である。タイトルからわかるとおり、これはジョゼフ・コンラッド『ノストローモ』(一九〇四)を下敷きにした作品である。コスタグアナとは『ノストローモ』の舞台となる架空の国の名だ。

あらすじ

語り手兼主人公ホセ・アルタミラーノが娘のエロイーサに対して自分の人生を語るという形式だ。語り出しのきつかけは「男が」、「小説家が」つまりコンラッドが死んだことだった。一九二四年八月七日の訃報を受け、ふたつの異なる環境を生きてきた同名(ジョゼフ Joseph とホセ Jose)の人物の人生がパラレルであり、かつ交錯する運命にあったことをほのめかし、自分

がその片割れに何かを盗まれたとあってホセは自分語りを始める。

しかし、そこでまず語られるのはホセの父親ミゲルの半生だ。独立後のコロンビアで続く自由派と保守派の内戦に翻弄され、ボゴタからパナマ地峡にやってきたミゲル・アルタミラーノが、アメリカ合衆国人技師ウィリアム・ベックマンの妻アントニア・デ・ナルバエスとの間に儲けた子が「ぼく」すなわちホセ・アルタミラーノであるという、自身の出自をまず明かすのだ。

それというのも、ホセの人生もまた父のそれと同様、内戦に翻弄され、外国人技師の妻との間に子を設けるといふものだからだ。ホセはパナマ運河建設に携わっていたフランス人技師ギユスターヴ・マデイニエの未亡人シャルロットと関係を持ち、娘を得るのだった。当初フランスが推進していたパナマ運河の建設は、周知のごとくアメリカ合衆国の手に渡り、千日戦争と呼ばれる内戦に乗じて合衆国はパナマをコロンビアから分離独立させる(一九〇三年)のだが、内戦の混乱に巻き込まれてシャルロットを失ったホセは、娘を置いてひとりイギリスへと渡る。

内戦に翻弄され、外国人技師の妻の子を儲けるといふアルタミラーノ親子の重複する人生をこうしてまとめ直してみると、まるでふたりの物語がコロンビアの典型的なナショナル・アレゴリーになつていくかのようだ。しかし、こうした使い古された構造からこの作品を救い出しているのが、ホセ・アルタミラーノが打ち立てるジョゼフ・コンラッドとの関係だ。錯綜した語りのうちに語り手ホセは、自らのものとパラレルなコン

ラッドの人生を語り、彼と自身の人生のあり得たかも知れない交錯を想像する。

情報提供者

既に述べたとおり、『コスタグアナ秘史』はコンラッド『ノストローモ』を下敷きにした作品だ。船乗りとして中南米を訪問したことのあるコンラッドが、パナマの分離独立の翌一九〇四年、コロンビア近辺をモデルとした架空の国コスタグアナを舞台に、その国の内戦と銀鉱山にむらがる利権とを扱った小説だと言え、『コスタグアナ秘史』が単なるナショナル・アレゴリーではなく、『ノストローモ』の書き換えでもあることがわかるだろう。『コスタグアナ秘史』がコロンビア（その一部だったパナマを含む）のナショナル・アレゴリーだとするなら、『ノストローモ』はポーランド人作家によつて英語で書かれたコロンビアのナショナル・アレゴリーだ。『ノストローモ』とパラレルな小説を書くということは、使い古されたナショナル・アレゴリーの構造を利用してコロンビアを描くということだけでなく、英文学の系譜に位置づけられているはずの『ノストローモ』をその系譜から外し、我々のものとして取り返す試みでもあるのだ。

訳者久野量一が「あとがき」で引用して紹介しているように、バスケスは『ノストローモ』を「スペイン語以外で書かれたラテンアメリカについての最良の小説」だと見なしている（「訳者あとがき」³¹⁶ページ）。『コスタグアナ秘史』に先んじてコンラッ

ドの評伝も書いているバスケスは、外国文学というよりは真正なコロンビア文学として、あるいはラテンアメリカ文学としてコンラッドを読んでいたに違いないし、そういうものとして『ノストローモ』に応答してみせたのだろう。

久野量一自身が、こうした作者の身振りをまとい直して見せている。小野正嗣や私（柳原）との鼎談でのことだ。アルゼンチンの作家リカルド・ピグリアがゴンブロヴィッチの『トランスアトランティック』をアルゼンチン文学として読んでいることを挙げ、外国語で書かれたラテンアメリカ文学という視座を説いている。そうした視座を獲得した時に浮上してきたのがコンラッドの『ノストローモ』であり、それに着目したバスケスだったという（二〇一六年四月二十六日「J・G・バスケスを芥川賞作家と読む」翻訳を考える①、於・東京外国語大学総合文化研究所。その後『週間読書人』二〇一六年六月十七日号に掲載）。

ホセ・アルタミラーノとジョゼフ・コンラッドの人生が平行するだけでなく交錯もするように、『コスタグアナ秘史』は『ノストローモ』と平行するだけでなく交錯もする。『コスタグアナ秘史』が「秘史」であるゆえんだ。イギリスへ渡ったホセはコンラッドの情報提供者となるのだった。『ノストローモ』はホセ・アルタミラーノからの情報を得て書かれたということなのだ。

コンラッドの『ノストローモ』序文には、この小説がホセ・アベリャノスとその著書『失政五十年史』から多くの情報を得ていると書かれている。ところが、この『失政五十年史』なる書物は出版されることがないとも付け加えられている。つまりこれはフィクションなのだ。ホセ・アベリャノスなどという人

物は存在しない。実際にはサンティアゴ・ペレス・トゥリアナとその著書『ボゴタから大西洋へ』が情報提供者であつただろうというのが定説のようだ。バスケスはこのペレス・トゥリアナを小説に登場させ、さらにはこの人物がホセとジョゼフの仲介をしたとの設定を作つた。ペレス・トゥリアナの情報ではまだ小説にするには足りないと感じていたコンラッドに、コロンビアから渡英したばかりの、新鮮な情報を抱えたアルタミラーノが紹介されたというのだ。そしてアルタミラーノは、コンラッドを前に自分の人生とそれをとりまく社会を語り、それが『ノストローモ』に反映された。

愛する者を失い、娘を手放し、祖国を後にするという三重の喪失に苦しむホセ・アルタミラーノの告白は、傷から癒えるためのひとつの治療であつただろう。それを単なる情報として利用したコンラッドは自らの想像した別の物語を紡いだ。これでは自分が浮かばれない。情報提供者としてのホセはそう感じたのだろう。コンラッドに自身の人生と物語とを盗まれたと感じたのだ。自らを取り戻すべく彼は、娘に向ける形で物語を語り始める。こうして語られた物語が『コスタグアナ秘史』だった。フィクションと現実、作家と情報提供者の古くて新しい問題を介して、こうしてふたつの文学作品は交錯する。

『情報提供者』*Los informantes* というのは『コスタグアナ秘史』の前作のタイトルだった(二〇〇四)。次作『物が落ちる音』*El ruido de las cosas al caer* (二〇一一)も語り手が他者に取材して第三者の人生をたどり直すという内容であつた。バスケスはこうした一人称による疑似ドキュメンタリーの手法を用いているという点でも極めてアクチュアルな作家だ。なんらかの情

報を得て物語を再構築する人物の視点から描かれたこれらの作品とは対照的に『コスタグアナ秘史』は語り手自身が情報提供者である。それだけ特異な一作なのかもしれない。一方、他言語によって既に優れたコロンビア文学が書かれてしまつて、いることに対する、遅れてきた世代からの反応である以上、自らの情報が歪められ利用されたと感じる情報提供者の苦悩は当然なのかも知れない。

遅れてきた旗手——『マリア』を読むエロイサ

いかにも、フアン・ガブリエル・バスケスは遅れてきたコロンビア文学の旗手なのだ。現在、コロンビア文学を担う者としては、コロンビアのナシヨナル・アレゴリーを描くだけでは充てんではない。別の言語で書かれたコロンビア文学をも相手にしなければならぬ。つまり、世界文学を視野に入れなければならないのだ。バスケスの後には『ノストローモ』を考慮の対象にしないコロンビア文学(もしくはラテンアメリカ文学)は説得力を欠くだけだろう。

一方で、過去のコロンビア文学への配慮も怠りがないのが、『コスタグアナ秘史』の優れた点だ。「これは死人が話したり、美しい女が空に昇つたり、司祭が熱い飲み物を飲んで宙に浮くといった例の本ではない」(28ページ)という一節を始め、ガブリエル・ガルシア・マルケスや彼の『百年の孤独』への言及、そこからの引用、書き換えは頻繁に散見される。それらを見つけて出し、小説の生起する十九世紀末のこの時代にはまだ存在し

ていなかっただけ、未来の先行作品にどのようなアプローチをかけているのかを確かめるのは、本書を読む楽しみのひとつだ。しかしここでは、もうひとつのロンドン文学の古典の採り入れかたを確認するに留めよう。

ガルシア＝マルケス『百年の孤独』にちょうど百年先んじて出版され人気を博したのがホルヘ・イサークスの『マリア』(Maria (一八六七))だ。父の友人の娘マリアを愛するエフライインの語りによる恋愛小説で、コロンビアのみならず広くスペイン語圏全般で受け入れられたロマン主義恋愛小説の代表作だ。ホセはこれを読み耽っているうちに寝入ってしまった娘のエロイーサをひとり残してロンドンに旅立つ。旅立つ直前、娘の読みさしの小説を手にして、彼は登場人物に感情移入する。

ぼくは、ハンモックの上で揺れずに眠っているお前のそばに立ち、お前がとても穏やかに息をして、胸と肩が一目見ただけでは分からないくらいに動いているすぐそばで、小説のなかのあの手紙、マリアがエフライインに、自分は病気で少しずつ死に向かっていると告白するあの手紙の場面を探した。エフライインはロンドンにいて、自分が戻れば彼女を助けられると思いい、すぐに出発する。その後、パナマを通り、地峡を横断して、スクーナー船エミリア・ロペス号でブエナVENTOURラまで運ばれる。その瞬間、ぼくは、しようと思っていることをする寸前になって、エフライインに対し、それまで誰にも感じたことのない強烈な同情の思いを感じた。エフライインの虚構の運命のなかに、それは逆を行く、歪んだだけの現実の運命が映し出されたような気がしたからだ。エフライインはパナマを通り、最愛の人に会うた

めにロンドンから戻った。ぼくは、自分の人生のすべてであった、あの大人になりかけの女を置いて、パナマから逃げようとしていた。ロンドンが、ぼくが行こうとしている場所の一つだった。(297ページ)

エフライインは医学の勉強のためにロンドンに渡った。そしてその間にマリアは病を患う。危篤の知らせを聞いて勉強をうちやめたエフライインが帰郷するとマリアは既に死んでいた、というのが小説『マリア』の結末だ。そのエフライインとは方角においても目的においてもまったく正反対な行動に出ようとしているホセが、エフライインに感情移入するというのは、考えてみれば奇妙な話だ。この奇妙な感情移入を説明する言葉を、私たちバスケスの読者は探さなければいけないのだろう。

おわりに

二〇一六年にはバスケスの小説二作品がほぼ同時に出版された。この『コスタグアナ秘史』と『物が落ちる音』(拙訳、松籟社)である。その数年前から、長篇第一作『情報提供者』が『密告者』(服部綾乃、石川隆一訳、作品社)として刊行されることが告知されている。短時日のうちに一気に紹介が進みそうだ。

(柳原孝敦)